

空飛ぶ法王まばゆき今日の初日の出

二〇〇九年は夏石番矢の句集でもって読み初めとした。屠蘇でめでたい気分となっていたせいか、読んでわくわくする。いい気持だ。読むうちに『空飛ぶ法王』は必ずや後世に残る句集であるという確信に似た気持が生じた。万一残らないようなことがあれば、それは夏石が悪いのではない。私の目利きが悪いのでもない。ひとえに後世が悪いのである。しかし人の世はそんなに悪いはずはないというのが私の予感である。

昔学生であったころの夏石、本名乾昌幸は全身が猪のような風貌であった。声も猪のごとく吃った。それが日本語を早口で話そうとする時だけでなく、フランス語でもせっついて口早に話そうとするのだから、ご愛嬌である。察するに本人、連想の方が先走って、余計なてにをはが抜け落ちるのだ。ということとは乾昌幸は本質的に俳句言語的感受性の持主なのである。彼は脳袋の中で余計な言葉は片端から切って落とす。その乾学生は社会に出るや、やがてなにかと競おうとするかのごとく、夏石番矢と非日本語的な大名乗りをあげた。空中をめぐる風車に格闘を挑むがごとき、およそ俳人らしからぬ号である。稚気愛すべき野蠻さだが、そこにこそ面目が躍如として存する。そんな番矢は超俗でもなく、世捨て人でもなく、古風な俳人でもとよりのない。そんな風は大前衛を称して以来、次から次へと矢を射るような調子で俳句を拙宅にも送りつけてくる。

「どんな男か」と正月、酒を飲みに来た旧友が聞くから「そうさな、法王の子供のような男だ。猪突猛進しているが、詩の世界では王者の風格がある。西洋でもドン・ナツイシで罷り通る」といったら相手はきよんとして、横文字の並んでいる句集の表紙を裏から開けて「法王は独身だろう。子供はいないはずだろう」と頓珍漢をいった。「なに、ルネサンスの頃には法王の落し子はざらにいた。詩の世界にも法王の落胤はいる。この句集は後世に残るぞ」といつてきかせた。相手は不審顔だが、それに構わずに私はおもむろに年賀状をしたためた。夏石番矢は住むところも富士見、鶴瀬と名もめでたい。なるほど手負いの猪だが不死身のはずである。「二〇〇九年元旦、御本御礼」と添えて

法王の子供空飛ぶめでたさよ

と書いた。本誌読者にもこの初の句でたちまちおわかりのように私には俳句の心得はない。すこぶる不調法な男で『吟遊』に書く資格などさらにない。昔の学生が『空飛ぶ法王』という大仰な題の句集を贈ってよこしたから「おっ、これは面白い」と感じて、年甲斐もな

く負けん気を起し五七五をひねって見たまでの話で、夏石番矢にひそむ稚氣が喜寿を過ぎた平川老人の稚氣を呼びさますのである。

その旧学生の夏石もいつか五十を過ぎて、二三年前、故郷の相生を訪ねて回想の一文を書いていた。家はなくなっており、自動車のパーキングにされてしまった更地に彼は憮然として立っていた。それで昔のことを思い出した。四半世紀前、彼が大学院生のころ岡山の学会からの帰りに同車した。すると山陽線の列車の窓辺で突然歓声をあげて「あ、あ、あすこだ」と遠足帰りの小学生のように全身で叫んで指さすではないか。「あすこが自分の育った家だ」そうはいやいである様を目の当たりにした私は「この男は天性の詩人だな」と感じた。今年の正月気分ですらにその感想を新たにされた。天衣無縫、天空を征くわれらが自在の詩人夏石を新句集にあらためて感じる節があるからである。

相生の松ははるかに空飛ぶ法王

「法王」と呼ばれるうちは御愛嬌だが、あらたまって「教皇」と呼ばれたら無冠の帝王も大きな体を縮めて恐縮するに相違ない。

教皇と呼ばれ昌幸恐慌す

マサユキという本名はショウコウと読めば教皇の子供の「小皇」となる。「なに小皇帝なもんか、おい昌公」と近所の子供からかわれたに相違ない。喧嘩してはでかい眼で睨みつけて、あのでっかい額を相手にぎゅうぎゅう押し付けたことだろう。苛められもしただろう。それに空飛ぶなどといい気になっていると墜落するにきまっている。失墜する理由はなにになにか。

空飛ぶ法王仙女の足がちらちらと

夏石番矢について偉いと感心するのは彼がインターナショナルな俳句とハイクのネットワークを編んで君臨しているからである。その昔、桑原武夫という旧京都学派の中心がいて、古い近代主義を新しそうに唱え、オピニオン・リーダーとして活躍した。国語のローマ字化を提言したり、国語の簡素化を主張したり、俳句の芸術性を問う「第二藝術論」を発表したりした。いってみれば今の山崎正和のような関西名士連の旗振り男であった。桑原の敗戦直後の俳句第二藝術論については「伝統的詩型である俳句のもつ前近代性を批判」などと『広辞苑』にも麗々しく出ている。日本というのは面白い国で、俳句という日本文化の悪口をいうと文化勲章をもらえたりする。しかしそれでも桑原武夫本人は芭蕉の俳句などすらすら口をついて出る男だったそうで、京大で習った友人は桑原を高く買っていた。

で夏石の俳句運動はと見ると、前近代的どころか生意気なほど新鮮で鋭角的で第一藝術

というか第一線の藝術である。封建的で閉鎖的であるどころか目をみはるほど国際的である。皮肉だが今の日本で、各国の詩人と連句の輪を広げ、鮮やかな国際交流をしているのはフランス語も解する俳人夏石番矢が第一人者だ。この夏石にごろごろと言われた日には仏文出の近代主義者など「クワバラ、クワバラ」と退散せざるを得まい。

一万年後 巨石はなお待つ 太陽と月

世界的に見ても立派な野人の見事な活動である。これは彼が『世界俳句入門』（沖積舎）で日本語に訳して見せた *Elise Tanguy* の句でフランス語の原句は

*Dix mille ans plus tard*

*Les mégalithes attendent encore*

*Le soleil et la lune*

という。夏石美学をわかちもつ感受性がいまや海外に多いことがこうした句集を読むとたちどころにわかる。面白いほどよくわかる。

かくいう提灯持ちの私はダンテ学者で、『地獄篇』『煉獄篇』『天国篇』の河出文庫本を補足すべき『神曲』講義を世に出すべく原稿に手を加えている最中である。私は日本語化した表現を尊ぶ者で、使い慣れた「法王」という言葉をキョウコウと発音すべきかキョウオウと発音すべきか戸惑うような「教皇」の語に置き換えるつもりはさらさらない。そもそも東京築地のヴァチカンの代表部の門標には法王庁と記されている。王より皇が上だからと改めようとした宣教師たちの魂胆がさもしいこともいけすかない。それで拙著にこのような註釈をこのたび書き添えたので、それもここに再掲させていただく。

私は最近夏石番矢の『空飛ぶ法王 一六一俳句 *Flying Pope 161 haiku*』（こおろ社発行・東京堂出版発売）という英訳も見事な、挿絵もはいた、刮目(かつもく)すべき句集を読んで爽快な気分を味わいましたが、あれを読んで私『神曲』翻訳の際に *papa* の語に教皇でなく歴史的に由緒のある法王を用いて良かったとあらためて感じました。夏石さんの俳句世界は、あれは「法王」だから天空を自在自由に舞えるので「教皇」だったらあはいかない。法王には高雅な鳳凰の響きもあるが、夏石俳句の法王が教皇などと呼ばれたら恐慌をきたして途端に天から墜落してしまうでしょう。もっともこうした私の感想は夏石番矢の俳句を読んでいただかないと読者の皆様に通じるべくもないが、読んだ方には即座に合点が行くと思います。俳句集として近年の日本の、というか世界のハイクの傑作です。

私はこんな歴史的場面も空想する。天正遣欧使節の「クワットロ・ラガツツイ」という

四少年は、本当はプロパガンダのために使われた、いわば拉致未成年者というのが歴史の真相に近い。それだけにもっと花をもたせてやらないと気の毒だ。それで

天正遣欧使節句集『空飛ぶ法王』を献上す

しかし少年たちに謁見を許し給うた法王はその直後に死去した。謹みて「アーメン」と唱えたい。

日英の句を両翼に鳳凰昇天す

(なおこの「夏石番矢讚」中の句は平川祐弘の元旦の句で夏石番矢の句ではない。念のため)